

江戸時代の「人魚」像

九頭見 和 夫

I はじめに

「人魚」という言葉には、時代や地域を越えて多くの人々を惹きつけて離さない不思議な魅力が潜んでいる。とりわけ童話、伝説等の文献に頻繁に登場する人魚の姿に、例えばアンデルセンの『人魚姫』（1837年）や小川未明の『赤い蠟燭と人魚』（1921年=大正10年）等の童話に登場する人魚の姿に、深い感動を覚えた人は決して少なくないであろう。それではこの「人魚」と呼ばれる生き物とは、いかなるものなのか。例えば江戸時代の黄表紙・読本の作者山東京伝の黄表紙『箱入娘面屋人魚』（1791年）に登場する人魚は、人間の浦島太郎が魚のお鯉と浮気をして誕生した、すなわち異種の生物の間に誕生した合の子として描写されている。また中国古代の地理書『山海経』では、声の小児の泣く声に似ているという理由で山椒魚が「人魚」に擬せられている。ここで人魚像の概略を把握するため辞（事）典等より「人魚」を取り上げる。

にんぎょ [人魚]

(1) 上半身が女身で下半身は魚の形をした想像上の動物。世界各地で種々の伝説を伴い、その出現は凶兆とも瑞兆ともされ、またこれを食うと若返るとの俗信があった。一説に、ジュゴンやマナティなどの海獣がモデルになったといわれる。(2) 山椒魚の異名。([『日本国語大辞典』]¹⁾)

mermaid

An imaginary species of beings, more or less human in character, supposed to inhabit the sea, and to have the head and trunk of a women, the lower limbs being replaced by the

tail of a fish or cetacean. In early use often identified with the siren of classical mythology. (“The Oxford English Dictionary”)²⁾

マーメイド Mermaid

中世英語 mermaid, mermayde. [mere] (ラテン語: meare) = sea (海); lake (湖), pond (池) + maid (乙女)。男性はMerman。海に棲む半人半魚の想像上の動物。人魚。アイルランドでは Merrow, ゲーリック語 Morundh, Murrúghach 即ち muir = sea 海 + oigh = maid (乙女) より派生。

(『妖精小辞典』)³⁾

以上の説明で共通している「人魚」像は、半身が人間（多くの場合女性）で下半身が魚という海など水と深い関わりをもつ、この世に実在しない想像上の動物である。これらの説明は、21世紀に生きる人々にとっては何の疑いもさしはさむ余地のない自明のことであろう。しかし一部の地域では現在においても恐らくはジュゴンなどの生物を人魚とみなし、人魚の実在を信じていることもまた事実である。日本では、江戸時代まで人魚出現の記録が、浮世草子のようなフィクションだけでなく、『吾妻鏡』のような歴史書にも残されている。例えば藤沢衛彦の『日本伝説研究二』⁴⁾によれば、最新の人魚出現の記録は江戸時代中期の宝暦8年(1758年)である。論を展開する上で有用と思われるので、少し長くなるが人魚出現の記録を以下に引用する。

(1) 清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う(伝説)。

(2) 推古天皇27年(619年)4月、近江国蒲生河(日本書紀・太子伝)

(3) 推古天皇27年(619年)7月、難波堀江

(日本書紀)

- (4) 天平勝宝8年(756年)5月2日, 出雲国安来浦(史籍集覧引)
- (5) 宝亀9年(778年)4月3日, 能登国珠洲岬(史籍集覧引)
- (6) 弘仁年中(810年), 近江国琵琶湖(広大和本草)
- (7) 正暦5年(994年)11月7日, 伊予国はしらの海(史籍集覧引)
- (8) 崇徳・近衛帝御宇頃(1140年前後), 伊勢国別保浦(古今著聞集)
- (9) 文治5年(1189年)夏, 陸奥外ヶ浜(北條五代記)
- (10) 文治5年(1189年)8月14日, 安芸国いえつの浦(史籍集覧引)
- (11) 建仁3年(1203年)4月, 津軽浦(北條五代記)
- (12) 建保元年(1213年)夏, 秋田浦(北條五代記)
- (13) 宝治元年(1247年)3月11日, 津軽浦(北條五代記)
- (14) 宝治元年(1247年)3月20日, 津軽浦(分類本朝年代記)
- (15) 宝治2年(1248年)9月10日, 陸奥外ヶ浜(北條五代記)
- (16) 延慶3年(1310年)4月11日, 若狭国小浜津(史籍集覧引)
- (17) 延文2年(1357年)3月3日, 伊勢国二見浦(史籍集覧引)
- (18) 天文19年(1550年)4月21日, 豊後国大野郡海(江源武鑑)
- (19) 元禄元年(1688年)7月20日, 津軽野内浦(津軽一統志)
- (20) 宝永年中(1705年前後), 若狭国大野郡乙見村(諸国里人談)
- (21) 元文2年(1737年), 能登国鳳至郡海中(広大和本草)
- (22) 宝暦8年(1758年)3月, 津軽石崎村湊(津軽日記)
- (23) 宝暦8年(1758年)8月, 津軽野内海(六

物新誌)

これらの記録から推測すると、「人魚」は、日本海沿岸の地域を中心に北は津軽(青森県)から南は豊後(大分県)に至る日本全国で出現している。ところでこの記録で理解に苦しむのは、人魚に擬せられているジュゴン棲息の北限でジュゴンが頻繁に出現する沖縄に出現の記録がないことである。おそらくこのことは、藤沢衛彦が参考にした大槻玄澤の『六物新誌』等に出現の記録がなかったことによると思われる。なぜなら沖縄の人々はジュゴンを「ざんのいお(儒艮)」と名づけ「人魚」と同義で用いているからである。例えば「儒艮(ざんのいお)」の哺乳せる様の女人に似るより誤なるべし。今なお俗に儒艮(ざんのいお)を人魚という。』(『大辞典』⁵⁾とある。

以下この小論においては、江戸時代の「人魚」像を解明するため、主に文学作品に登場する「人魚」を取り上げ分析する。対象となる作品は、(1)井原西鶴の浮世草子『武道伝来記』(1687年)、(2)山東京伝の黄表紙『箱入娘面屋人魚』(1791年)、(3)曲亭馬琴の読本『南総里見八犬伝』(1814年-1842年)等の小説、および菊岡沾涼の『諸国里人談』(1743年)、(5)鳥翠台北莖の『北国奇談巡杖記』(1806年)、(6)松浦静山の『甲子夜話』(1821年-1841年)等の随筆である。

II 小説の中の人魚像

(1) 井原西鶴の「命とらるる人魚の海」

「紫式部とともに、日本最大の小説家」⁶⁾といわれる井原西鶴(1642年-1693年)の浮世草子の中でいわゆる武家物の分類に属する作品の一つに『武道伝来記』がある。この作品は、序文に、「中古、武道の忠義、諸国に高名の敵うち、其はたらしき聞伝て、筆のはやし詞の山、心のうみ静に、御松久かたの雲に、よろこびの舞鶴是を集ぬ。」⁷⁾とあり、また傍題に「諸国敵討」とあることでも明らかかなように様々な形の敵討ちを扱っており、全体は8巻、各巻はそれぞれ完結した4つの短い物語(全部で32話)から構成されている。本論で取り上

げる「命とらるる人魚の海」は、巻2の4に登場する物語で、不遇の死をとげた父の敵を娘が父の愛人や浪人の助けをかりて討つという内容である。

まず話の梗概を記すと、松前の海岸の奉行役人中堂金内は、夕方小舟で鮭川の入江を横切る途中人魚に遭遇し、これを半弓で射止める。この話に性格の悪い御留守番の青崎百右衛門が疑問を呈し金内を侮辱する。そこで金内は、話が事実であることを証明するため射止めた人魚をさがすが、果せず病死する。一人残された16才の娘と父の身の回りの世話をしていた21才の鞠の二人は、上意をうけた横目役野田武蔵のはからいにより浪人増田治平の助太刀を得て、百右衛門を討ち果たす。その後金内の娘は婿を迎えて中堂家を再興し、鞠も良縁を得る。それからしばらくして金内が射止めた人魚が発見され、金内の名誉が回復される。

この物語も西鶴の「敵討」を扱った物語の特徴といえるかもしれないが、主君のための敵討ちではなく、侮辱されたことが原因で病死した親の敵討ちが対象となっていて、敵討ちの武勇談よりも敵討ちにいたる人間関係が描写の中心になっている。富裕な町人社会に属する商人西鶴にとって武家社会はしよせん異質なものであり、彼の意識の中に越えがたい大きな断層が存在していたことは確かである。それでは西鶴にとって、この物語の題名にまでした「人魚」とは、いかなる存在なのか。人魚像を詳細に描写した冒頭の部分に注目する。

奥の海には、目なれぬ怪魚のあがる事、其例おほし。「後深草院宝治元年三月廿日に、津軽の大浦といふ所へ、人魚はじめて流れ寄、其形ちは、かしら、くれなるの鶏冠ありて、面は美女のごとし。四足、るりをのべて、鱗に金色のひかり、身にかほりふかく、声は、雲雀笛のしづかなる音せし」と、世のためしに語り伝へり。⁸⁾

この冒頭部分を参考に西鶴の描く「人魚」像を整理する。

(1) 人魚の出現状況。場所は奥の海(津軽の大浦)、時期は宝治元年(1247年)3月20日。藤沢衛彦がまとめた人魚出現の14番目の記録に該当する。前田

金五郎も人魚出現の年月日が一致することから、この物語の原典として『新編分類本朝年代記』(貞享元年、1684年)を有力視するが、詳細については後に考察する。人魚の出現状況をさらにみていくと、先ほど引用した冒頭に続く部分に、「白波俄に立さはぎ、五色の水玉数ちりて、波二つにわかりて、人魚、目前にあらわれ出しに、舟人おどろき、何れも気をうしなひける」とあり、西鶴が人魚の出現を嵐の前兆ととらえていることが推測できる。

(2) 人魚の形姿。顔は美女のように美しくて体臭もあり、声は雲雀の鳴き声に似ている。この描写からはアンデルセンの『人魚姫』(1837年)に近いロマンチックな人魚像が想像されるが、この西鶴の人魚像で特に気になるのは、体臭、すなわち「身にかほり深く」の部分である。今後様々な人魚像を紹介することになるが、西鶴のように人魚の体臭に言及したものはたして存在するのか。例えば西鶴の参看が有力視され、この物語の原典と目される『新編分類本朝年代記』の巻一・仁・雑之類では「人魚」はどのように描写されているのか。

人魚 後深草院宝治元年三月廿日、人魚死、津軽浦流寄。形如人、有腹四足。先代有之、兵乱起。因有天下御祈祷。⁹⁾

『年代記』という性格からか、事件が簡潔に記述されているだけで、例えば体臭など人魚に関する詳細な描写はない。浮世草子のようなフィクションとの相違によるのであろうか。ところで同じ宝治元年に日付は若干異なるが、『吾妻鏡』の巻三十八・五月二十九日の条にも人魚出現の記録が見い出される。

三浦五郎左衛門尉参左親衛御方、申云、去十一日、陸奥国津軽海辺、大魚流寄、其形偏如死人。先日由比海水赤色事、若此魚死故歟。随而同比、奥州海浦波濤、赤而如紅云々。此事則被尋古老之处、先規不快之由申之。所謂文治五年夏有此魚、同秋泰衛誅戮。建仁三年夏又流来、同秋田左金吾有御事。建保元年四月出現、同五月義盛大軍、殆為世御大事云々。¹⁰⁾

『新編分類本朝年代記』の場合同様、治承4年(1180年)の源頼朝の挙兵から文永3年(1266年)六代將軍宗尊親王が辞任するまでの鎌倉幕府の歴史を記述した『吾妻鏡』の場合も、その性格上事件の記録が中心で、人魚の姿の描写は極めて簡略である。例えば「大魚」が死人のようであったこと、このことは『新編分類本朝年代記』の記述と同じ。海の色が赤かったこと、このことは死んだ魚が海面に浮く赤潮のことか。宝治元年以前の文治5年(1189年)にも、建仁3年(1203年)にも、建保元年(1213年)にも人魚が出現し、そのたびに大事件が発生していることなど。特に大事件についてここで歴史を検証してみると、宝治元年(1247年)は、鎌倉幕府の執権北条時頼が外祖父安達景盛と謀って、幕府の最有力御家人である三浦泰村以下一族を滅ぼした「宝治合戦」が発生した年である。この合戦の結果、鎌倉幕府創設以来の大名で、北条氏に対抗できる三浦・千葉の一族が滅び、覇権を確立した北条氏は専制への道を歩むのである。北条氏覇権確立以前の文治5年の夏には、源頼朝の奥州征伐によって藤原泰衡が殺され、奥州藤原一族が滅亡する。また建仁3年には、源頼家が北条政子によって出家させられ、伊豆修善寺で殺される。さらに建保元年には和田義盛が挙兵し、幕府によって制圧される。

以上のように、なぜか人魚の出現と歴史上の大事件が結びついている。それに対し西鶴の「命とらるる人魚の海」には、大事件の記述はないが、人魚の出現に恐れおののいた船上の人々が泣き叫び、ついには全員気を失った様子が描写されていて、少なくとも西鶴の理解においては、人魚は「怪魚」、すなわち嵐をよぶ怪物、嵐の前兆をつけるものであったと推測される。いずれにせよ西鶴が参看したと推測される『新編分類本朝年代記』にも『吾妻鏡』にも、「命とらるる人魚の海」におけるような人魚についての詳細な描写がないことからみて、「命とらるる人魚の海」の人魚像はおそらく西鶴自身の想像力によって創り出された独自のもののなのであろう。あるいは他に西鶴が参考にした文献が存在するのか。

『武道伝来記』以外にも西鶴が「人魚」について言及した個所がある。『好色五人女』(1686年)の巻五の五「金銀も持あまつて迷惑」と『西鶴織留』(1694年)の巻五の一「只は見せぬ仏の箱」で、関係する部分を引用する。

庭蔵みれば、元渡りの唐織山をなし、伽羅掛木のごとし。さんごじゆは壺匁五分から百三十目迄の無疵の玉、千式百三十五、柄鮫、青磁の道具かぎりもなく、飛鳥川の茶入、かやうの類ごろつきて、めげるをかまはず、人魚の塩引、めのふの手桶、かんたんの米かち杵、浦嶋が包丁箱、弁才天の前巾着、禄壽の剃刀、多門天の枕鏝、大黒殿の千石どをし、ゑびす殿の小遣帳、覚へがたし。(『好色五人女』)¹¹⁾ 其証拠には、我等寺同行の人、十六・十四に成娘二人もたれしが、世盛のこしらへ、何にひとつふそくもなく、美をつくしたる衣装、敷銀千枚づつ付て、聲は願ひのままの所へ仕付られしに、姉むこ次第に家栄へければ、世につれて姿も若やぎ、三十にあまる年も、嫁入時のすがた今に残りて、人皆女仙と名付、「是はあやかり物」といへり。此女、不老丸も吞ず、人魚も喰ねど、鱈のはしりを十月比より喰、正月の事ども霜月中に仕まはせ、当年も又五拾貫目はのびたる白銀の花を見て、目出たき事ばかり耳に聞し、嬉しき事を目にみて暮せば、どこで年のより所なし。(『西鶴織留』)¹²⁾

町人、特に遊里とは無関係な一般家庭の女性の愛欲を扱った『好色五人女』、町人の経済生活を描写した『西鶴織留』。西鶴がこれらの浮世草子を創作した江戸時代との相違によるのか、現代人には耳なれないものが多数列挙されている。その中で特に注目したいのは、「人魚の塩引」、「人魚も喰ねど」の表現である。「人魚の塩引」とは、人魚の塩漬けのことで、当時人魚は長寿の薬として珍重され、引用した二つの例のように金持は所有していたのである。

それでは西鶴の人魚についての表現は、何の影響を受けたのか。例えば人魚の肉を食べた若狭の

比丘尼が八百歳まで生きたという八百比丘尼伝説の影響によるのか。西鶴が活躍した江戸時代の前期には、オランダ等ヨーロッパから伝えられた博物学の知識はまだ流布しておらず、一方八百比丘尼伝説は、すでに紹介した藤沢衛彦作成の人魚出現の記録にも、「清寧天皇5年(480年)、八百比丘尼人魚を食う(伝説)」と記されているように、奈良時代以前の大和朝廷の頃にはもう北陸を中心に全国いたる所に流布していて、大阪の富裕な町人の家に育った知識人西鶴も当然知っていたと思われるのである。例えば八百比丘尼関係の伝説の宝庫福井県小浜市に伝わる伝説の一つは、比丘尼、八百年、椿の木がキーワードである。

道満という漁夫の娘が海岸に流れ寄った人魚を拾って食べ、年をとらなくなる。娘は自分だけあまりに長く生きていることに飽き、尼となって洞窟に閉じこもり、「入り口に植えた椿の木が花を咲かせている間は生きている」と言い残す。町の人はこの八百比丘尼の姿を二度と見なかったが、洞窟の奥から鐘を叩く音だけが聞こえた。八百比丘尼は、源平盛衰の状況を見聞していたと伝えられる。¹³⁾

「源平盛衰の状況を見聞していた」とあることから推測して、この比丘尼はおそらく源頼朝が鎌倉に幕府を開いた西暦1185年前後の八百年間を生存したのであろう。

(2) 山東京伝の『箱入娘面屋人魚』

江戸時代後期の安永・天明(1770年-1780年代)の頃、江戸町民の間で流行した民衆本に黄表紙がある。この本は、大衆を対象としていたこともあり、思想性といったものは全くなく、強いてあげれば諷刺が中心で、全体が文章と絵とによって表現された絵本といえるのである。本論では、「人魚」との関係で黄表紙の作者として著明な山東京伝(1761年-1816年)の『箱入娘面屋人魚』(寛政3年=1791年)を取り上げることにする。まず最初に話の梗概を記す。

中洲が再び龍宮の支配下となり、見世物や水茶屋などができる。龍宮の親玉龍王の息女乙姫の男

妾に浦嶋太郎がいる。彼は中洲の利根屋のお鯉と恋仲になり子供(人魚)が生まれる。

ついに鯉は身籠りければ、浦嶋もいろいろ心を痛め、ひそかに産ませけるに、あさましや、人間と魚との中にできた子なれば、頭は人にて、体は魚なり。これ、いわゆる人魚なるべし。¹⁴⁾

このことが龍王の耳に入ることを恐れた浦嶋は人魚を捨子にする。釣をしていた神田八丁堀の釣舟宿の平次の舟に人魚が飛び込む。平次は驚いたが、女盛りの人魚の顔が美しいので家につれかえり女房にする。貧乏な平次に同情した人魚が大磯の女郎屋舞鶴屋に身売りする。しかし人魚の花魁「人魚」は、客に気持悪がられ、平次のもとに返される。近所にももの知りがいて、平次は人魚をなめると長寿を得ることを知る。

一人の博物ありけるが、平次が人魚を女房にして餅をつくとき、彼に示して曰く、「夫、本草に人魚と称ずる者二種あり。曰、鯉魚、曰、鮠魚。又異物志に、人の形に似て長さ尺余、頂の上、小穿ありとは記せしかど、かかるほつとり者なる事を知らず。また、昔より言ひ伝ふるに、人魚をなめたる者は千歳の寿命を保つと言へば、何にもせよ、金になる代物じや」と言われて、平次大に喜び、早速門口へ、寿命の薬、人魚御なめ所、といふ安看板を出しければ、何が無性に欲張り、天命の物差しに外れて、長生をしたがる俗物ども、千年生きると聞き、我も我もとなめに來たりけるこそ愚かなれ。¹⁵⁾

平次は大金を手に入れるが、女房ゆえになめすぎたため7才の小僧に若返る。そこに浦嶋太郎が鯉とともにあらわれ、玉手箱のふたをあけた所平次は丁度いい年令になる。人魚も一皮むけ足と手がついて本当の人間になり、二人は仲むつまじくくらす。なお平次は人魚のぬけがらを薬屋にうり金をもうける。

一般大衆がよく知っている人魚伝説と浦島説話が組み合わされたこの作品で特に注目したいのは、釣舟屋の平次が近所の博物から聞いた人魚について

ての話である。ひとつは人魚には鯨魚と鮫魚の二種類があって、形は人間の姿に似ていて背丈が一尺余り、頭の上に小さな穴があいていること、もう一つは人魚をなめると千歳まで寿命が延びることである。この人魚についての知識を山東京伝は何から得たのか。前半の人魚の形に関する部分については、中国古代の地理書である『山海経』が参考になる。

又東北二百里，日龍侯之山。無草木，多金玉。決決之水出焉〔音訣〕，而東流注于河。其中多人魚。其状如鯨魚四足，其音如嬰兒〔鯨見中山経。或日，人魚即鮫也。〕¹⁶⁾

「人魚」と呼ばれる鯨魚も鮫魚も具体的にはサンショウウオを指すが、この記述によれば、足が4本あり、その泣き声が人間の赤子に似ているという。『山海経』の名は、十世紀に発行された『倭名類聚抄』にも見られることから、西鶴同様江戸時代の富裕な町人階級に属する知識人山東京伝の場合も『山海経』を読んでいた可能性は低くないと思われる。

人魚 兼名苑云，人魚一名鯨魚，上音陵，魚身人面者也，山海経注云，声如小兒啼故名之。〔倭名類聚抄〕¹⁷⁾

つぎに後半部分の人魚をなめると千歳まで長生きするという人魚の効用の部分についてであるが、この知識の出所も興味深い。「なめる」、「千年」というキーワードは八百比丘尼伝説にはない。オランダ等ヨーロッパから伝来した博物学の知識なのか定かではない。他にも人魚の登場する黄表紙として芝全交作『大違宝船』(天明元年=1781年)があるが、省略する。

(3) 曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』

山東京伝に師事し最初黄表紙作者から出発し後に読本作者となった曲亭馬琴(1767年-1848年)の代表作に『南総里見八犬伝』(1814年=文化11年-1842年=天保13年)がある。28年の歳月をかけ馬琴75才の時に完成したこの作品は、室町時代の下総国(千葉県)の豪族里見家の伏姫と妖犬八房との間に生まれた八犬士が里見家発展のために活

躍する長篇伝奇小説で、「第九輯」に「人魚」についての記述が見い出される。

「我家五世の祖なりける，麻呂太郎平信之より相伝へし，人魚の膏油今なほ有り。伝へ云この膏油は，昔一箇の樽に装られて，塩浜に漂寓りしを，信之不思議に拾得て，もて秘蔵せり。其樽は，樟木をもて作り，藤蔓をたがにしたり。其大洋に漂ふこと，年久しかりければや，牡蠣海藻などの多くつきたるが，人魚膏油と写したる。四箇字は幽に読れしとぞ。然れどもいづれの国の産物にて，流れ来ぬる故を知らず。又何に用ることを知らず。凝りて蠟の像くなりけるを，そがまま蔵め置けるに，有一年一個の頭陀ありて，我家に宿せし日，其頭陀件の膏油，我家に在りと聞知りて，主人信之に誨るよう，もし人ありて，人魚の肉を啖ふときは，其壽三千年を有つべし。惜かな膏油なれば，齡を延す奇効なし。さばれ是を燈火になすときは，雨風に滅ずして，日月と光を同くす。又人の身の目鼻口耳臍肛門，すべて九孔に塗りて水に入れば，大寒の日といへども，なお温にて，凍ることなく，波を潜りて海をも涉さん。又刀剣に塗るときは，鉄を切り角をさくべし。試給へ，といひしとぞ」。¹⁸⁾

人魚の肉や油について興味深い事実が列挙されている。すなわち人魚の肉を食べると寿命が三千年続くこと，また人魚の油については，燈油として用いると雨風によって消えないだけでなく日光や月光と同じ明るさを保つこと，目や鼻など人間の身体にある9つの孔に塗ると大寒でも寒さを感じることなく，海の中をもぐって向こう側へ行くことができること，さらに刀剣に塗ると鉄や角を切り裂くことができることである。

まず人魚の肉と三千年の寿命についてであるが，人魚の肉を食べた比丘尼の寿命は八百年であった。三千年の寿命は，自分の寿命が長いことに飽きて洞窟に閉じこもった八百比丘尼の寿命よりはるかに長い。岡山県の伝説¹⁹⁾には，人魚の肉を食べたために千年生きたという「千年比丘尼」の話も

残っているが、それでも『南総里見八犬伝』の三千年の寿命には遠く及ばない。この「三千年」という数字の出所は何なのか。一般には、「八百」同様「三千」も数が多いことを表すが、例えば江戸時代には吉原の遊女の数が多いいことを例えて「三千」を用いている。宗教界、例えば仏教の世界にも、「三千大千世界」というわれわれ人間の住む世界全体をさす言葉があるが、キリスト教の世界には、キリストが平和の王国である「千年王国」に千年間君臨するという信仰が存在する。中国では盛唐の詩人李白（701年－762年）の秋浦歌に、「白髪三千丈」という表現がある。長い間蓄積された心配や悲しみによって白髪となり三千丈も伸びたというこの言葉は、誇張した表現とみなされている。

それでは馬琴の「其壽三千年」の表現は何に由来するのか。単なる誇張的な表現と理解しているのか、あるいは馬琴が参考にした先例があるのか。例えば江戸時代に広く読まれた本に『水滸伝』があるが、家光による鎖国政策実施後も中国の書物は長崎を通して日本に入って来て、馬琴など多くの文学者に影響を与えている。

『水滸伝』の影響を受けた江戸の文学作品はきわめて多いが、代表的な作品として、寛政11年（1799年）、山東京伝の『忠臣水滸伝』、そして曲亭馬琴『南総里見八犬伝』（文化11年、1814年－）などがある。²⁰⁾

他にもオランダ等ヨーロッパから伝来した博物学の影響も、例えば人魚の油の場合など、考慮しなければならないと思われるが、詳細については後にゆずることにする。

Ⅲ 隨筆（紀行文）の中の人魚像

(1) 菊岡沾涼の『諸国里人談』

俳諧を学び、東京神田で表具師を業としていた菊岡沾涼（1679年－1747年）は、仕事のかたわら日本全国を旅行し、その時に見聞した事柄を「神祇、釈教、奇石、妖異、山野、光火、水辺、生植、気形、器用」に類別整理し、『諸国里人談』（五巻）を出版した。「卷之一」の「一神祇部」に

「人魚」に係る記述がある。

人魚 若狭国大飯郡御浅嶽は魔所にて、山八分より上に登らず。御浅明神の仕者は人魚なりといひつたへたり。宝永年中乙見村の漁師、漁に出けるに、岩のうへに臥たる体にして居るものを見れば、頭は人間にして襟に鶏冠のごとくひらひらと赤きものまとひ、それより下は魚なり。何心なく持たる權を以打ければ則死せり。海へ投入て帰りけるに、それより大風起つて海鳴事一七日止ず。三十日ばかり過て大地震し、御浅嶽の麓より海辺まで地裂て、乙見村一郷墮入たり。是明神の祟といへり。²¹⁾

人魚の姿は、「襟に鶏冠のごとくひらひらと赤きものをまとひ」など井原西鶴の人魚像に極めて類似している。また人魚を權で打ち殺した一カ月後天変地異が生じたことについて、沾涼は明神の祟りと解釈し人魚を神聖視している。本書が出版された江戸時代中期（1743年=寛保3年）の頃においても、西鶴が活躍した元禄の頃、すなわち江戸時代前期と同様、「人魚」は恐ろしい存在でその出現は、菊岡沾涼のような当時の知識人の間でも凶兆とみなされ恐れられていたと推測される。

(2) 鳥翠台北莖の『北国奇談巡杖記』

金沢俳壇の名家に生まれた鳥翠台北莖（生没年未詳）は、故郷の金沢を中心に北陸数カ国を旅行し、その時見聞した伝説等を書き記したのが『北国奇談巡杖記』（五巻）（1806年=文化3年）である。「卷之五」の「若狭国部」に「人魚」に係る記述がある。

上下大明神 上下大明神と申奉るは、当国第一の宮にして、世に知るところの靈社なり。そも此神のいにしへを尋るに、竜宮城より夫婦の神あらはれて、此国に年久敷たまひ、浅からざりける契りをむすび、数歳を経たまひしかども、不老無病にして莊美端正ましましければ、人皆嘆崇して、君等の齡貌の若さよといひしより、この国の名となりきとぞ。或説に、若狭国より、人魚といへるものいづ

る。其形花の有る時の顔ばせにして、両手も又人のごとく、腰より魚鱗ことごとく生じ、鱗尾備り、あやしきものなり。是を喰ふも長寿せると、古書にもしるしはべる。これらも若狭の称にたよりあるにや。竜宮といへること仏説にして、神代巻にも出たり。こは琉球の由を桂秀樹の京、桂周樹のことなり。書には頭はせり。²²⁾

人魚の姿は、アンデルセンの『人魚姫』等「ドイツロマン派」以降の作品に描かれたロマンチックな印象を与える人魚像に近い。顔は、「花の有る時の顔ばせ」とあることからみて明らかに女盛りのおそらくは美形で、両手も人間と同じ形をしているが、腰から下は鱗と尾鰭がついていて明かに魚の形をしている。姿に関しては、「面は美女のごとし」と記した西鶴にも近いが、西鶴や他の作家と異なり人魚の崇りなど人魚の恐ろしさについては述べていない。場所が若狭ということもあり、人魚の肉を食べると長寿が得られるという、「古書」とことわっているが、明かに「八百比丘尼」伝説の影響が認められる。

(3) 松浦静山の『甲子夜話』

九州平戸藩主松浦静山（1760年－1841年）が、1821（文政4）年から死の直前の1841（天保12）年までの20年間、その時々に見聞したことを書き留めたのが『甲子夜話』である。本書は、正篇百卷、続篇百卷、三篇78卷、全篇で278卷からなる大著で、例えば本論で取り上げる人魚の記述も各篇に認められるが、「正篇」と「三篇」より紹介する。

人魚のこと、大槻玄沢が『六物新誌』に詳なり。且附考の中、吾国所見を載す。予が所聞は、延享の始め伯父母二君平戸より江都に赴給ひ、船玄海を渡るとき天気晴朗なりければ、従行者ども船槽に上りて眺臨せしに、舳の方十余間の海中に物出たり。全く人体にして腹下は見へざれども、女容にして色青白く、髪は薄赤色にて長かりしとぞ。人々怪みて、かかる洋中に蟹の出没すること有べからず抔云ふ中に、船を望み微笑して海に没す。尋で

魚身現れ、又没して魚尾出たり。此時人始て人魚ならんと云へり。今『新誌』に載る形状を照すに能合ふ。漢蛮共に東海に有と云へば、吾国内にては東西二方も見る事有る歟。（卷二十の二十六）²³⁾

人魚のこと、既に前編廿巻に載たり。其後又聞たれば記す。某語る。去る亥の春、平戸の鉄砲足軽、森滝蔵と云者出府する船中、讃岐の四嶋と云あたりを渡りし折から、天快晴して風も順なれば、帆を掛けて走りたるに、船より六七間も去りて、海面に何か黄色なる魚浮み出づ。長さ二尋許、其形は定かならざれど、頭は全く婦人の如く、色白く乱髪を被りたり。船は風に随て行き、彼は潮に逆て泳ぐ。滝蔵観て舟子に問へば、知らずと云ふ。察するに、斯体の者は、船中にては名を云ふことを嫌ふゆえなり。されば正しく人魚なり。（『三篇』、卷十七の十六）²⁴⁾

幕末の世相風聞を記録したこの大著で松浦静山は、外様大名として常に幕府に対して細かい配慮を示す一方、諸国に伝わる狐狸妖怪の怪異談、例えば「人魚」については、話の性格によるのか、非常にのびのびと描写している。

松浦静山の人魚の記述で注目すべきことは、J.ヨンストンの『動物図譜』（1660年）等ヨーロッパの博物学の影響が明白な大槻玄沢の『六物新誌』を松浦静山がすでに読んでいたことである。『六物新誌』の発行が1786年であることを考えれば、九州平戸の大名で教養人であった静山が『六物新誌』を入手し読んでいたとしても不思議ではないのである。『六物新誌』との関係については、ヨーロッパの博物学の影響も含めて後に分析することにするが、ここでは主に人魚の姿について西鶴等の人魚像と比較する。

静山も西鶴も人魚を女性、つまり美女として描いている。例えば「女容にして色青白く、髪は薄赤色にて長かりし」、および「頭は全く婦人の如く、色白く乱髪を被りたり」等の静山が見聞した人魚像は、西鶴の人魚像「かしら、くれなるの鶏冠ありて、面は美女のごとし」に酷似している。また

船子が恐怖から人魚の名を口にすることを嫌うことについても、人魚の出現をみて船中の人々が恐ろしさで気を失った西鶴の場合同様人間にとって人魚は恐怖の対象である。明かに異なるのは、人魚の出現場所で、静山が見聞した人魚は九州の玄海に出現し、一方西鶴の人魚は北の海、つまり北海道の松前に出現する。

IV おわりに

本論においては、江戸時代の「人魚」像を解明するため、主に小説類や随筆等文学作品に描かれた人魚を中心に分析してきた。まず人魚の姿についてであるが、西鶴や静山が詳細に描写しており、それによれば、上半身が美女で下半身が魚の姿をしている。しかし美女の姿をしていても当時の人々にとっては、彼らの理解を越えた恐怖の対象であった。そしてこの人魚像は、例えば甘い歌声で舟人を誘惑し溺死させたという「ローレライ」等西欧の人魚を想起させ、興味深い。

一般に姿は腰から上が美しい乙女で魚の尾を手に水かきがあり、月夜に岩の上で鏡を手に長い髪を梳り、甘い歌声で人を水の中に惹き入れ溺れさせる。人魚は海から流れを遡って淡水の河や湖に現われるが、人魚が姿を現わすのは、嵐や災難の前ぶれである。人間の漁夫と恋に陥るが、生まれる子供は体中うろこで被われている。²⁵⁾

ここに描かれたアイルランドなど西欧に伝わる「人魚」像をみると、漁夫と人魚の間に生まれた子供が、山東京伝の描く浦島太郎と魚のお鯉の間に生まれた人魚の姿に類似していることがわかるのである。

つぎに『南総里見八犬伝』等多くの文献にみられたのが人魚の肉や油に関する効能についての記述で、例えば肉を食べると長生きをし、油を身体に塗ると寒中でも寒さを感じないなどである。肉については八百比丘尼伝説の影響が有力であるが、油については伝説の他に西欧から伝わった博物学の影響も排除できないと思われる。以上のことか

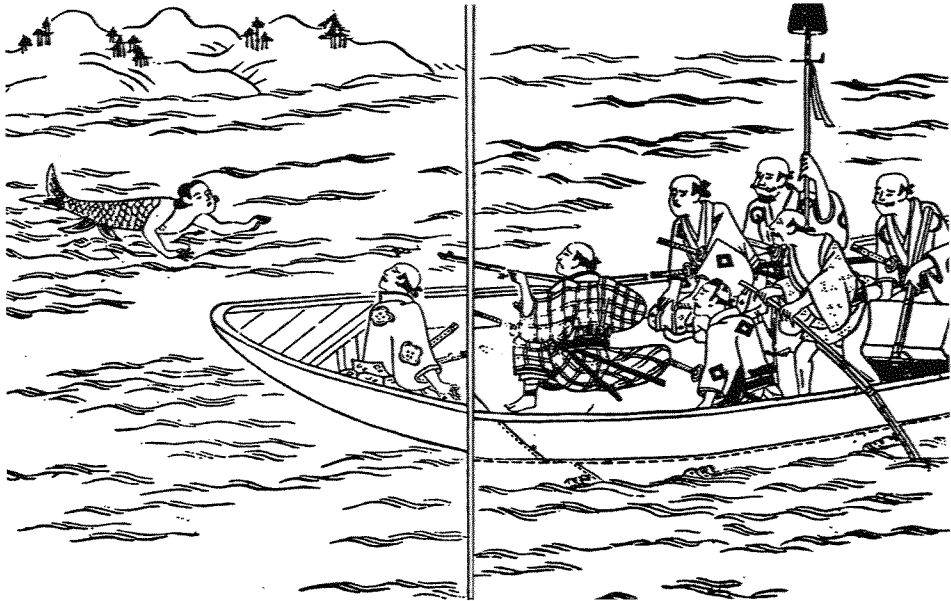
ら三代将軍徳川家光による鎖国政策の実施以降渡来した外国の文献、特にオランダを通して伝来したヨーロッパの博物学関係の文献が、江戸時代の人魚像解明に不可欠と判断されるので、次稿で詳しく分析することにする。

(2005年10月12日受理)

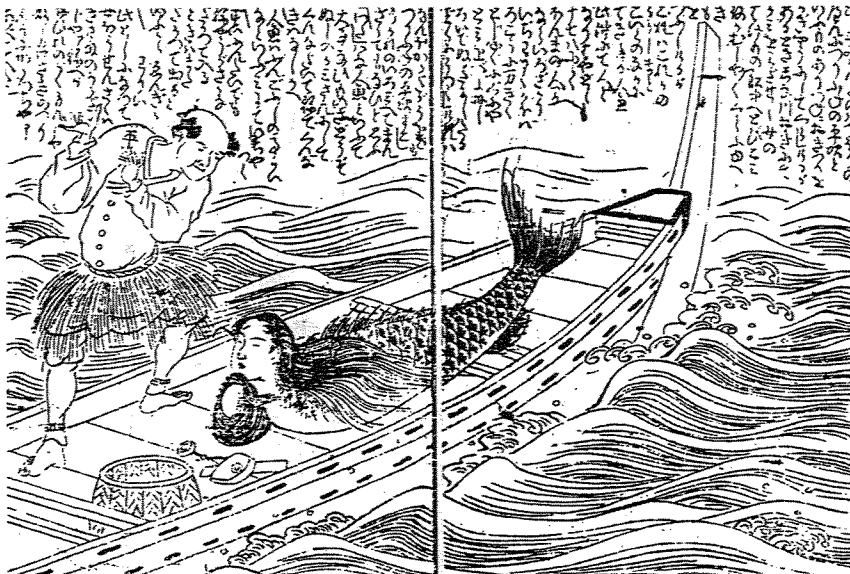
注

- 1) 『日本国語大辞典、第十巻』(小学館、昭和49年) p. 546.
- 2) The Oxford English Dictionary. Volume IX. Oxford (Clarendon Express) 1989. p. 637.
- 3) 井村君江『妖精の国』(新書館、1987年) p. 276.
- 4) 藤沢衛彦『日本伝説研究二』(六分館、昭和6年) p. 40-42.
- 5) 『大辞典、第二十巻』(平凡社、昭和11年) p. 111.
- 6) 吉田精一『文芸読本西鶴』(河出書房新社、昭和37年) p. 1.
- 7) 麻生磯次、富士昭雄『対訳西鶴全集七、武道伝来記』(明治書院、昭和53年) p. 3.
- 8) 同前掲書、p. 77.
- 9) 前田金五郎『『武道伝来記』の事実と創作』(『文学』岩波書店、1966年7月) p. 49.
- 10) 国書刊行会編『吾妻鏡下巻』(大観堂、昭和18年) p. 359.
- 11) 麻生磯次、富士昭雄『対訳西鶴全集三、好色五人女』(明治書院、昭和58年) p. 147.
- 12) 麻生磯次、富士昭雄『対訳西鶴全集十四、西鶴織留』(明治書院、昭和59年) p. 152-153.
- 13) 稲田浩二、小沢俊夫編『日本昔話通観、第11巻 富山・石川・福井』(同朋舎、1981年) p. 188-189.
- 14) 水野稔編『山東京伝全集、第二巻』(べりかん社、1993年) p. 436.
- 15) 同前掲書。p. 445-446.
- 16) 前野直彬『全釈漢文大系、第33巻 山海経・列仙伝』(集英社、昭和55年) p. 196.
- 17) 源順『倭名類聚、卷第十九』p. 2.
- 18) 小池藤五郎校訂『南総里見八犬伝(九)』(岩波書店、昭和48年) p. 124.

- 19) 稲田浩二, 小沢俊夫編『日本昔話通観, 第19巻 岡山』(同朋舎, 1979年) p. 346-347.
- 20) 大木康「江戸と明の小説と図像をめぐって」(『東洋文化85号』東京大学東洋文化研究所, 2005年3月) p. 84.
- 21) 『日本随筆大成, 第二期24』(吉川弘文館, 昭和50年) p. 427.
- 22) 『日本随筆大成, 第二期18』(吉川弘文館, 昭和49年) p. 198.
- 23) 中村幸彦, 中野三敏校訂『甲子夜話2』(平凡社「東洋文庫314」, 昭和52年) p. 12-13.
- 24) 中村幸彦, 中野三敏校訂『甲子夜話三篇2』(平凡社「東洋文庫415」1982年) p. 65-66.
- 25) 井村君江『妖精の国』p. 276.



井原西鶴『武道伝来記』(明治書院)より



山東京伝『箱入娘面屋人魚』(べりかん社)より



(曲亭馬琴『南総里見八犬伝』
(岩波文庫) より)

Das Bild der “Seejungfrau” in der Edo-Zeit

KUZUMI Kazuo

Die Seejungfrau ist das Fabeltier, aber im Wort “Seejungfrau” hält sich verborgen der mysteriöse Zauber, der über Zeit und die Gegend viele Leute anzieht. Darum gibt es sehr viele Sagen und literarische Werke über die Seejungfrau von alters her in der Welt. Was haben die Leute denn durch die Beschreibung der Seejungfrau mitteilen wollen?

Nun wird in diesem kleinen Aufsatz für die Erläuterung des Bildes der “Seejungfrau” in der Edo-Zeit, wo viele Dokumente über das Erscheinen der “Seejungfrau” bleiben, hauptsächlich das Bild der “Seejungfrau” in folgenden Werken untersucht.

- (1) Die Novelle “Inochi-toraruru-ningyo-no-umi (命とらるる人魚の海)” von IHARA Saikaku (1687) .
- (2) Die Novelle “Hakoirimusume-menya-ningyo (箱入娘面屋人魚)” von SANTO Kyoden (1791) .
- (3) Der Roman “Nanso-satomi-hakken-den (南総里見八犬伝)” von KYOKUTEI Bakin (von 1814 bis 1842) .
- (4) Das Essay “Shokoku-rijin-dan (諸国里人談)” von KIKUOKA Senryo (1743) .
- (5) Das Essay “Hokoku-kidan-junjyo-ki (北国奇談巡杖記)” von CHOSUIDAI Hokuhei (1806) .
- (6) Das Essay “Kasshi-yawa (甲子夜話)” von MATSURA Seizan (von 1821 bis 1841) .